

No.59

社団法人 日本化学工業協会

JRCC NEWS

2010 秋季号



レスポンシブル・ケア[®]



レスポンシブル・ケアと 企業レピュテーション



中央労働災害防止協会 理事長
澤田 陽太郎

レスポンシブル・ケア（RC）は、地球環境の保全と持続可能な開発を実現するための具体的な方策の一つとして「アジェンダ21」で推奨され、日本では（社）日本化学工業協会と日本レスポンシブル・ケア協議会の主導のもと、化学物質を扱う企業に普及していることに敬意と感謝の意を表します。

また、RC活動の目指すところ、手法は先進的なものから普遍的なものになりつつあり、現実には、他産業でも広まっていることは、時代の流れとはいえ注目すべきことと思う。

RCはPDCAサイクルに沿って実施され、実施項目の一つに「労働安全衛生」がある。私共、中央労働災害防止協会は事業主の自主的な労働災害防止活動を支援することを目的に設立され、教育研修、安全衛生技術サービス、情報提供等の事業を通じて「安全・健康・快適」な職場づくりをお手伝いしている。

RCとの関連でいえば、PDCAサイクルのP（計画）の基礎となるリスクアセスメントや労働安全衛生マネジメントシステム（OSHMS）に関する研修、コンサルティング等を行っており、OSHMS認定事業では大企業を中心とする357事業場（平成22年10月現在）に認定を取得していただいている。

また、情報提供事業では当協会安全衛生情報センター・ホームページへのアクセス総件数（平成22年度上半期）をみると、第1位が「GHS対応モデルMSDS」約348万件、第4位が「労働安全衛生法名称公表化学物質」約112万件と化学物質関係が上位に来ている。

ところで、近年「企業レピュテーション」という用語を見聞する機会が多くなった。その厳密な定義は様々だが、一般的には「企業が社会から受ける評判や評価」という意味で使われている。

企業にとってレピュテーションの重要性が格段に高まっている背景としてはコンプライアンス、企業倫理、CSR、環境・エコが社会的に注目されるようになったことが大きいとされ、今や、レピュテーションが企業の生死を左右しかねない。例えばアメリカではエンロン事件に絡んで刑事告発され、それまでの良い評判に壊滅的打撃を受けて消滅した監査法人アーサー・アンダーセン、日本では偽装牛肉事件の雪印食品やライブドア事件が想起される。

企業はこうした環境変化を深く認識し、社会的責任を果たすとともに良いレピュテーションを構築する努力が必要になっている。企業に対する良いレピュテーションは、ある意味、世間やステークホルダーの企業への期待、それもビル・ゲイツの言う“創造的資本主義”企業としての姿勢、取り組みへの期待なので、企業がそれに応える先見性のある明確なアイデンティティと一貫したメッセージをもって、コントロール不可能な世間一般との双方向のコミュニケーションを図ることが極めて重要になる。

貴協議会の会員企業の皆様はRC実施項目の「社会とのコミュニケーション」について多様な活動を展開しておられますが、企業レピュテーションの構築という観点から一層の充実が図られることを期待します。



「第42回国際化学オリンピック 日本大会」を終えて



第42回 国際化学オリンピック閉会式での日本代表生徒

国際化学オリンピックについては、昨年のJRCC NEWS 2009 秋季号に、「第42回国際化学オリンピック日本大会」というタイトルで、一度寄稿させていただきました。今回はその続編として、今年4月に代表生徒4名が選ばれ、その後、彼らがオリンピックにどのように臨んだかを、「夢・化学-21」委員会事務局として比較的身近でサポートした立場から、皆さんにご紹介したいと思います。

すでにご存じの通り、今年の「第42回国際化学オリンピック日本大会」で日本の代表生徒4名は、滋賀県立膳所高等学校2年の浦谷浩輝君（滋賀県）と栄光学園高等学校3年の遠藤健一君（神奈川県）の2名が金メダル、筑波大学附属駒場高等学校3年の片岡憲吾君（東京都）と灘高等学校2年の齊藤颯君（兵庫県）の2名が銀メダルと過去最高の成績を収めました。しかも遠藤君は昨年のイギリス大会に引き続き2年連続の金メダル獲得という快挙を成し遂げました。

この4名が代表生徒に決まったのは4月2日。昨年9月に代表候補21名が認定され、今年1月の1次選抜（筆記）で9名に絞られ、3月の最終選抜（筆記試験と実験試験）を経ての決定でした。

代表生徒の指導には、日本化学会化学教育協議会 化学グランプリ・オリンピック委員会 オリンピックWGの先生方が当たり、ひとりひとりに最寄りの大学の研究室が割り当てられ、大学の先生から直接講義や実験指導が受けられるサポート体制が整えられました。また、4月から7月にかけて月に1回、強化訓練合宿が行われました。この合宿では、集中講義や実験指導はもちろんのこと、歴代のオリンピック代表OB・OG達との交流が図られ、彼らの経験談（失敗談）に基づく貴重なアドバイスなどもありました。私たち、「夢・化学-21」委員会事務局も、この合宿の会場や宿泊手配などでお手伝いをさせていただきました。

この合宿には、もう一つの狙いがありました。国際化学オリンピックは個人戦ですが、10日間という長丁場でもあり、外国の生徒達の中で揉まれても、実力を発揮するためには、日本の代表生徒4人の協力が必要です。もちろん、この4人は今まで面識がなかったため、

この4ヶ月の間により関係を築く必要があり、そのため合宿でもありました。ところが、今年の4人はおとなしく、あまり会話も弾まず、そのような状況のまま7月を迎えてしまいました。心配したオリンピックWGの先生は、7月の直前合宿ではホテルの部屋をシングルではなく、わざとツインにして一緒に泊まらせるなど、いろいろと工夫をされていました。

このような状況で迎えたオリンピック本番、私たちは若干の不安を抱えたまま代表生徒を送り出しました。でも、周囲の大人が案じることはありませんでした。結果は、冒頭に述べたとおり過去最高の成績を収めました。私も、早稲田大学大隈講堂での閉会式に出席しましたが、そこには10日前の彼らとは全く別人の見違えるほど成長した4人がいました。記者会見での自信にあふれた堂々とした受け応えには、本当にびっくりしました。大会期間中、彼らはいろいろな問題に直面し、4人で助け合い結束を固め成長したのだと思います。若い人の可能性を改めて思い知らされた瞬間でした。彼らはたまたま「化学」に優れ、国際化学オリンピックという場で大きく成長しました。でも、身の回りのお子さん誰にでも同じような可能性があると思います。私にとっても、今後も引き続き「夢・化学-21」委員会事務局として、少しでも多くのお子さんの可能性を引き出すお手伝いができればと思える「第42回国際化学オリンピック日本大会」でした。

（「夢・化学-21」委員会事務局 井上 歩 記）



第42回 国際化学オリンピック参加者全員



第42回国際化学オリンピック代表生徒と来年の「第43回国際化学オリンピックトルコ大会」代表候補生徒

「日化協 LRI 10周年記念事業」

社団法人 日本化学工業協会 化学品管理部 大島健幸



人の健康や環境に及ぼす化学物質の影響についての関心が高まった1990年代後半、国際化学工業協会協議会 (ICCA : International Council of Chemical Associations) において、「自ら資金・人的資源を投入して、人の健康や環境に対する化学物質の安全性を科学的に評価するための基礎的なデータ収集や評価技術の開発研究を長期的に支援する長期自主研究 (LRI : Long-range Research Initiative)」に取り組むことが提案されました。具体的には、研究支援を通じて、化学物質の影響を評価するための技術開発を促進し、影響評価について科学的知見に基づいた判断を得、政策への反映を推進していくことを意図したもので、社団法人日本化学工業協会 (日化協) では ACC (米国化学工業協会) や CEFIC (欧州化学工業連盟) に遅れること約2年、2000年より具体的な研究提案の公募を開始して本格的に取り組むを開始し、本年でちょうど10年が経過しました。日化協 LRI の組織や活動の概要は、JRCC NEWS 2008年秋季号に紹介されています。

日化協では、LRI 活動10周年を記念して、本年8月26日、経団連会館国際会議場において、「LRI 10周年記念国際シンポジウム - 化学が築く Sustainable Life! 最先端の研究を通して明るい未来を支える LRI」を開催し、国内の関係官庁、研究機関、大学、会員企業の担当者や研究者、ICCA、ACC 及び CEFIC からの LRI 推進事務局担当者をはじめ約300名の参加を得、これまでの活動の成果を広く皆様にご紹介するとともに、国内外からの講演者を招待して化学物質管理に関する最新の研究動向を紹介しました。

日化協 LRI の成果報告

ICCA-LRI 運営委員である小林喜光三菱化学株式会社

社長の開会挨拶に続き、ICCA-LRI 運営委員会議長の Dr. Mostowy から ICCA-LRI の組織と最近の活動状況および今後の方向性が、ACC-LRI 責任者の Dr. Bahadori から ACC-LRI の最新の取り組み状況が報告されました。

続いて、日化協 LRI 戦略・調整ワーキンググループリーダーである福島 明氏より、日化協 LRI の概略と10年間の支援研究成果が分野ごとに詳細に報告されました。

「内分泌かく乱作用分野」では、野生メダカの性転換は自然状態でも発生しており、自然界の姿を知ることの重要性が検証された研究、また、「ホヤ」の詳細研究では化学物質の環境指標生物としての有用性が明らかになり、両研究ともに、その後、環境省の研究資金を得て詳細研究が進められた経緯が報告されました。「神経毒性分野」では、幼若期における化学物質曝露の影響把握が重要であるため、幼若動物を対象とした学習行動試験装置が開発され、その有用性が示された研究が、「発がん分野」では、変異発がん物質のみならず非変異発がん物質を短期間で効率よく検出する簡易検出法研究が紹介されました。この研究は午後の「招待講演」において研究者自らによりその詳細が報告されました。「免疫毒性分野」では、小腸免疫における免疫細胞の活性化にレチノイン酸が有用な機能を果たしていることを世界で初めて示した研究が、「リスク評価の精緻化分野」では、動物実験で得られる化学物質の毒性データからヒトの安全性をより正確に推定し、化学物質のヒト血中濃度からその曝露量を推定する簡易モデルが紹介されました。

また、ICCA における LRI 研究の方向についての討議を通じて、新規技術、曝露評価、ヒト健康・環境科学を今後指向する共通の方向性や、各極が重複を避け協調して研究を進めていくことの合意が紹介されました。

最後に、日化協 LRI は、10年間を通じて、より精緻な化学物質のリスク評価・管理に資する研究に成果を挙



げてきたこと、また、各企業専門家が研究課題の審査、採択、評価に直接関与して推進するという日本独自のLRI研究支援体制により各企業専門家の学問的知識レベルが向上し、大学等の研究機関との関係強化が図られたこと等が大きな成果として紹介され、会員企業によるLRIへの理解と支援への感謝が述べられました。

招待講演

海外からの招待講演では、米国環境保護庁のDr.Hubal氏より、大量の化学物質のリスク評価、リスク管理のためのデータ要求とリスク評価の優先性決定支援のため、曝露情報を最新の計算技術と情報技術を用いて分子生物学的知見と統合していくための最新の取り組み「ExpoCast™」プログラムに関する最新研究報告例が紹介されました。また、欧州委員会共同研究センター 健康・消費者保護研究所のDr.Anklam所長からは、政策立案者に対する科学とリスク評価の支援と題して、政策は科学に基づき決定されるべきであるが、政策は今日判っている事実に基づくのみで明日判明する事実に基づくことはできないため、科学者はたとえ不確定であっても可能な限り科学的な意見を政策立案者に提供することが重要であること、また、最近の科学の進歩による新たな製品についての適切な政策立案には、科学的にバランスの取れたリスクとベネフィットの適切なリスク評価が必要であることが、例を挙げて説明されました。

オランダ ワーゲニンゲン大学のDr.Frewer教授からは、科学の進歩や発明によるリスクとベネフィットを含む科学的情報の効果的なコミュニケーションには政策立案者と科学者と社会との十分な情報交換が不可欠であること、これを通じてのみ、社会のニーズを満たす政

策ができること、リスクベネフィット評価は政策決定を一般の人々に伝えるベースとなる政策ツールとして有用であることが説明されました。

国内研究者の招待講演では、財団法人食品薬品安全センター 秦野研究所 田中憲穂部長により、「形質転換細胞を用いた迅速かつ精度の高い発がん物質の短期検出法」の講演が行われ、変異発がん物質のみならず非変異発がん物質の検出に有用な動物代替試験法についての研究成果が報告されました。本試験法は、NEDOの資金を得て発展し、現在は、試験法の国際的基準である「OECDテストガイドライン」への採用に向けての本格的評価が実施されているものですが、その萌芽的・基礎研究段階においてLRIによる継続的支援が行われた賜物であるとして、LRIによる研究初期支援への感謝が示されました。

最後に、庄野常務理事より、本日の講演の総括として、遺伝子情報や分子生物学的情報、曝露情報等を取り込んでコンピュータを用いて情報処理していく新たなリスク評価手法の進展、日本発研究の世界への進展成果、研究者によるバランスの取れたリスクベネフィットコミュニケーションの重要性が再確認され、今後の取り組みへの示唆に富む有意義な招待講演であったことが述べられました。

続いて、西出専務理事より、LRIは地味ではあるが着実な成果を挙げてきたこと、アカデミアとの交流成果、化学業界が重要な問題として基礎的な分野へも研究を進めてきたことを社会に発信できたことを述べ、最後に、今後の化学業界が抱える課題解決を担う重要なLRI研究への継続的支援を各方面にお願いする挨拶を以って、成功裡に閉会となりました。

持続可能な社会の発 存在感のある会社を

第一工業製薬株式会社



執行役員 生産管理本部長 関口 恒さん

線香屋の一角からスタート

——第一工業製薬の概要から聞かせてください。

関口 1909年、負野薫玉堂という線香屋の一角で、蚕繭解舒液を製造することから当社はスタートしました。これは石鹼、界面活性剤の一種で、蚕から絹を取る時に使用され、絹糸紡の品質向上に寄与しました。昨年、創業100周年を迎え、「チェンジ100計画」という中期経営計画を推進中です。「工業用薬剤のトップ企業として、時代を先取りする」という経営理念を掲げ、社是「産業を通じて、国家・社会に貢献する」、社訓「品質第一、原価削減、研究努力」の創業精神を基本に事業を展開しています。現在は、当社の原点である界面活性剤に加え、食品添加物や水溶性高分子材料をはじめとするアメニティ材料、ウレタン樹脂・原料を中心としたウレタン材料、光硬化樹脂用材料・難燃剤等からなる機能材料、リチウム電池の開発、界面化学等の固有技術を応用した電子デバイス材料といった事業分野で製品を供給しています。2009年度の売上高は約440億円、比率は界面活性剤が32%、アメニティ材料17%、ウレタン材料16%、機能材料21%、最近力を入れている電子デバイス材料が14%程度となっています。かつては「モノゲンユニ」に代表される家庭用洗剤も手掛けていましたが、今は工業用薬剤を中心とする完全な化学品メーカーですね。

——レスポンシブル・ケア導入時の状況はいかがでしたか。

関口 年に1～2回、全社的な総括を行うとは言え、それまでの環境・安全活動は事業所単位、現場主体の取り組みであったことは否めません。1998年にJRCCに加入し、レスポンシブル・ケアを導入する際には、全社一丸でトップダウンの活動としてスタートしました。しかし当初は「何だ、それは」という反応が多かったのも事実です。まず社内周知・啓蒙活動から始め、理念・内容の浸透を図ると共に、レスポンシブル・ケア委員会、レスポンシブル・ケア推進グループを設置し、担当者会議を開催する等、組織・体制の整備も進めました。

当時はISO9002の認証取得にも取り組んでおり、内部監査や文書化の重複等、戸惑いも見られましたが、徐々に、レスポンシブル・ケアは環境・安全・品質等、全てを包含した活動であるという認識が定着していったと思います。

地球を守るための自主的な活動

——特に変化した点はありますか。

関口 法令遵守だけではなく、我々の地球を守るための自主的な活動であると強調されたため、それまでよりレベルの高い取り組みだということも当時、滋賀工場長だった私自身も感じましたね。一方でISO9002、14001の認証取得活動に苦勞している時期でもあり、また新たな負担が増したという感覚で、現場では抵抗もあったと思います。この点に関してはRCニュースを頻繁に発行するなど、教育・啓蒙に注力したことが理解を深める一助となりました。PDCAサイクルや文書化を通じて、欠落していた部分、社内規程の関連性等が明確になり、活動の体系化が進みました。現在は、ISOより上位の、全体を統括する概念としてレスポンシブル・ケアが位置付けられています。

——そろそろ、マンネリ化の懸念も…。

関口 まだ、そこまでの段階には至っていませんね。レスポンシブル・ケアは残念ながら化学産業に特化した活動なので、電子材料分野の営業の人達などは理解していない可能性もあります。他方、導入当初とは社会的背景も異なり、例えば地球温暖化問題に関する議論などが活発に行われ、当然、社員の意識も変化しています。従って、活動が更に進展していく余地は十分にあると考えています。

燃料転換によりCO₂排出を大幅に削減

——レスポンシブル・ケアにより、大きな成果が上がった分野は？

関口 天然ガスへの燃料転換により、2009年度のCO₂排出

展に貢献し、 目指します。

量は1990年度比45%削減されました。産業廃棄物に関しては、外部リサイクル化率の向上等に努めた結果、最終処分量を71%削減しています。PRTR対象物質についても、代替品の利用等によって大幅な排出削減を実現しました。労働安全衛生においては、以前からゼロ災活動を継続しているため、レスポンス・ケア導入で劇的に変化することはありませんでした。ただし、不休業災害の低減やリスクアセスメントの分野では改善すべき点があると認識しています。

——研究開発部門の活動状況を聞かせてください。

関口 最近、注目されている化学物質管理については、お客様からの要望も多く、原料の調査等、設計段階から留意しています。また、VOC削減に寄与する水系ウレタン樹脂製造プラントを新設するなど、様々な環境配慮製品の開発も推進しています。

——社会とのコミュニケーションは？

関口 滋賀事業所の例では、近隣の消防署や医師会と合同で防災・救助訓練を実施しています。工場内に入っただき、実践しながらの訓練を行うので、消防士、医師の方々にも好評です。各事業所では周辺の清掃活動、自治会の方々との懇談会、地域行事への参加や支援に積極的に取り組んでいます。当社では長年、高等専門学校のインターンシップを受け入れており、最近は看護学生の実習受け入れや小学校への出前授業も始めました。これらの活動は化学産業に興味を持っていただくと同時に、若者の理科離れ対策にもなると期待しています。

環境負荷低減はコストダウンにも直結

——現在、特に力を入れている活動は何ですか。

関口 ボイラー等の燃料転換、排水処理に関する新技術の導入といった環境負荷低減対策には継続して取り組んでいきます。そのためには、従業員に対する環境教育も重要です。一方、環境負荷低減はコストダウンにも直結すると考えており、本社のコストダウン推進室が中心となって各事業所と連携し、省エネルギーをはじめとする諸施策に注力しています。労働安全に関しては、体験学習を取り入れ、度数率の低下に努めています。リスクアセスメントについては事業所間で温度差が感じられることから、本年度の重点課題と位置付け、意識の向上や組織の整備を進めています。

——今後の目標を聞かせてください。

関口 当社の企業倫理憲章の中に「常に環境の視点を忘れないクリーンな事業活動を実践し、地域社会との共存、調和を図る」「個々の従業員の人格・個性を尊重し、自己実現が図れる機会を提供する。また、安全で働きやすい職場環境を確保する」という項目があり、これは正にレスポンス・ケアの理念に合致していると思います。この精神を社内に周知徹底することにより、持続可能な社会の発展に貢献し、存在

感のある会社を目指していきたいと考えています。

——日化協レスポンス・ケア委員会に対する要望はありますか。

関口 会員交流会における事例紹介は非常に参考になり、担当者が本音で意見交換できる点も有意義だと感じています。現在、半期に1度の開催ですが、回数を増やしていただければ、と思います。また、階層別のRC教育を充実させるために、会員各社の管理職に対する研修を実施していただけないでしょうか。



高等専門学校生のインターンシップ（京都事業所）



東近江消防署・医師会と合同で
実施された集団救急救助訓練
（滋賀事業所）

事業所概要

東燃化学株川崎工場（以下、川崎工場）は、川崎地区浮島コンビナートの南に位置し、親会社の東燃ゼネラル石油株とともに浮島地区のコンビナートの中心プラントを形成しています。

東燃化学株は、1960年に東燃（現東燃ゼネラル石油株）の100%出資により設立され、1961年にスチームクラッキング装置（エチレンプラント）の建設を開始し、翌1962年3月に竣工式を迎えました。その後スチームクラッキング装置の増設、エチレン、プロピレン、C₄留分等の石油化学基礎製品の製造設備を整え、1972年までにほぼ現在の形ができてきました。

また川崎工場は、設立当初から親会社である東燃ゼネラル石油株の石油精製との有機的な統合を行い、工場運営の一体化を図ってきています。さらに効率的な組織運営のために機能別に共通組織を活用しており、安全・衛生・環境（SHE）に関わる活動は統一組織で運営しています。



工場全景

レスポンスブル・ケア活動について

安全の確保と環境の保全は企業活動の基本であり、最も重要な課題です。川崎工場では安全基準を確実に遵守し、安全・衛生・環境面でも優れた事業所を目指すために、安全・健康・環境に関するマネジメントシステムとしてOIMS（Operational Integrity Management Systemの頭文字を取ったもの）を導入しています。このシステムはエクソンコーポレーション（現エクソンモービルコーポレーション）が開発した、安全・衛生・環境のリスクを管理するための包括的で組織的に構成された枠組みです。川崎工場では1996年に工場運営の柱として導入し、強力にこの活動を推進しています。

OIMSでは工場の運営に必要な基本要素として11の「要素（エレメント）」が設定され、それぞれの「要素」

を基にして21のマネジメントシステムを構築しています。RC活動もこの基本システムの一環として「環境保全」、「地域社会への情報周知」といったシステムでPDCAを回しています。例えば、「地域社会への情報周知」では、手順書を定め、安全・衛生・環境・セキュリティに関するトピックスを含んだ社内報等を地域社会・官庁・マスコミ・近隣会社に配布する、工場見学の受け入れや、地域で開催されるスポーツ大会・カルチャースクール・美化等の活動を支援する等が規定されており、またこれらの実施結果は毎月開催されるOIMS委員会で工場幹部に報告されています。

地域とのコミュニケーションについて

川崎工場の立地する浮島地区は都内からのアクセスが便利で、また石油精製と石油化学が一体化した大形コンビナートであることから、海外からの視察団や消防庁・経済産業省等からの工場見学の機会が多く、地域官庁からも多数の工場見学を受け入れています。また近隣の小中学校からの先生方、生徒たちの工場見学にも対応しています。

地域住民の皆様とは、町内会を通しての親善スポーツ大会へ参加し、婦人部の皆さんを対象にした華道教室等も開催しています。特に好評なのは川崎工場が敷地・道具を提供し、消火器を用いて実際に燃焼物を消火する訓練を定期的に行っていることです。訓練では所轄消防署の協力も得て、基本操作から実施し、こちらから近隣中学校に出向いて行うこともあります。実際に消火器を用いて消火する機会がないこともあり、参加者からとても有意義な経験をしたと喜ばれています。

今後とも、所轄官庁・近隣住民の皆様とはさらにコミュニケーションを深めていきたいと考えています。



小学生の工場見学（消防車を体験）



町内会の皆様による消火体験

事業所の概要

UMG ABS株は1963年に日本で最初にABS樹脂の生産販売を始めた宇部サイコン株と、三菱レイヨン株のABS樹脂事業が統合されて2002年に設立されました。以来、互いの持つ技術を融合させ、多様化するお客様の要求に対応できる製品の開発、およびサービスの提供を行ってきました。

宇部工場は、瀬戸内海に面した山口県宇部市に位置しており、ABS樹脂をはじめ、耐候性に優れたASA樹脂、AES樹脂、その他、耐熱樹脂、難燃樹脂などの生産を行っています。製品の主な用途は、樹脂の持つ特性を活かし、家電、自動車、住宅・建材、IT機器など多岐にわたります。また、研究開発本部を置き、新たな製品の開発に日々努めています。

近年では資源循環型社会の構築へ向けて、使用済みABS樹脂製品の再資源化（マテリアルリサイクル）や、カーボンニュートラルの考え方を基にして、ポリ乳酸等の植物由来樹脂といった当社独自のポリマーアロイ技術を用いて材料設計した新規樹脂を開発・販売するなど、環境に配慮した製品の開発にも取り組んでいます。



工場全景

レスポンスブル・ケア活動

宇部工場は1997年にJRCCに加盟し、レスポンスブル・ケア活動を事業活動の基盤として取り組んでいます。また、1997年にISO9001の認証取得、2000年にISO14001の取得、2003年にOHSAS18001の認証を取得し、レスポンスブル・ケア活動を展開する具体的な手段として、活動の推進に役立てています。

環境に対しては、環境方針に沿って、VOC排出量削減、省エネルギー、CO₂排出量削減、廃棄物削減などに取り組んでおり、それぞれの取り組みにおいて成果を上げています。

特にVOC排出量削減に関しては、2001年、2004年に導入した2基の排ガス処理設備により、VOC排出量の90%以上を削減しています。更に臭気対策にも効果を発揮し、設置前と比較して臭気が抑制されています。今後も安定運転を継続し、現在の稼働率を維持できるよう努めていきます。

労働安全衛生に関しては、保安防災や健康障害に対するリスクアセスメントを充実させ、負傷及び疾病の予防に努めて



排ガス処理設備

います。それに加え、各職場を対象とした安全診断や衛生診断の実施、産業医によるメンタルヘルス講習会の開催等を行い、安全衛生に関わる意識の定着と高揚に努めています。

緊急時への取り組みとしては、全従業員が参加する総合防災訓練や、新入社員を対象とした初期消火訓練を実施しています。さらには、従業員の消防技術の向上を目的とした社内消防操法競技大会の開催、宇部市防災協会主催の消防競技大会へ出場等により、万が一の事故が発生した際に、被害を最小限に抑えられるよう備えています。

地域とのコミュニケーション

宇部工場はRC山口西地区地域対話、宇部地区RC地域対話集會に参画し、環境保全や安全防災への取り組み等について地域の皆様にご紹介すると共に、いただいたご意見を更なる取り組みの参考とさせていただきます。

また、工場周辺の清掃、市内主要道路の清掃、宇部港の清掃などの美化活動への参加、森林保護等のボランティア活動、各種地域イベントへの出展などにも積極的に参加しています。毎年11月に開催される「宇部祭り」には社員100名以上でパレードに参加するなど、地域とのコミュニケーションを大切にしています。



宇部祭り

平成 22 年度 会員交流会(福岡)を開催しました

会員交流会は、JRCC 会員相互の情報交流を深めて、それぞれの RC 活動の更なる改善につなげるため、毎年度 2 回大阪・東京で開催しています。しかしながら九州等の事業所の方にとりましては、遠方のため参加しづらいというご意見もあり、本年度は 5 年振りとなる福岡（博多）で開催しました。

会員交流会（福岡）は 10 月 29 日（金）に TKP 博多シティセンターで開催され、山口・広島、九州地区の事業所の方を中心に 35 名が参加しました。

交流会では、日化協 RC 推進部からの開会挨拶の後、各分科会に分かれて討議を行いました。今回の分科会テーマは「環境保全（地球温暖化問題）」「労働安全衛生（労災ゼロを目指した活動）」「レスポンシブル・ケア活動（地域とのコミュニケーション）」の 3 つで、その中でも労働安全衛生は、参加希望者が多く 2 チーム

構成となりました。分科会の議論を活発化するために、事前に参加者の意向をアンケートしたり、話題提供資料よりテーマを絞ったりと分科会毎に工夫をしていました。これによって座長の方も司会進行がスムーズに行えて、より充実した議論ができました。

分科会終了後、全体会議の場で、会員交流 WG の田代主査（住友化学）から、最近の JRCC の活動内容の説明が行われました。

久しぶりの地方開催となった会員交流会ですが、ほぼ全員の方より「今後も福岡での開催を希望する」とのご意見をいただき、開催頻度についても、「毎年または隔年」と希望された方が多くを占めました。全ての会員の方がご満足いただけるよう、引き続き地方での開催も検討していきます。



全体会議



分科会

分科会名	座長	副座長	話題提供者
環境保全 (地球温暖化問題)	藤川 修三 (宇部興産)	谷口 信雄 (日本化薬)	原田 一茂 (下関三井化学)
労働安全衛生 -A (労災ゼロを目指した活動)	三浦 潔 (日本ペイント)	田代 宏 (住友化学)	北川 智治 (昭和電工)
労働安全衛生 -B (労災ゼロを目指した活動)	米村 直己 (電気化学工業)	大村 哲也 (三菱レイヨン)	田村 陽一 (三菱化学)
レスポンシブル・ケア活動 (地域とのコミュニケーション)	竹田 千寿 (三井化学)	宮園 忠文 (日本ペイント)	松本 亨 (住友化学)

各分科会座長



藤川さん



三浦さん



米村さん



竹田さん

リスクコミュニケーション研修

2010年9月13～14日、1泊2日の日程で大阪のクロスウェーブ梅田にて、リスクコミュニケーション研修を行いました（参加者27名）。年1回、東京方面と大阪方面で交互に開催しており、今回は大阪での開催となりました。

この研修は、現在地域対話を担当されている方や、これから地域対話を担当される方をはじめ、関心のある会員の方などなたでも参加いただけます。リスクコミュニケーションの大切さ、そのノウハウを学ぶことは社外だけでなく社内にも役立てていただけるものと思います。

はじめに講義により基礎力を養い、その後グループに分かれて演習をし、最後に模擬形式で対話集会を行いました。

講師からの「リスクコミュニケーションの成功とは合意・リスクを受容してもらう等の企業の目的達成を必ずしも意味してはいない。適切な情報伝達・交換による関係者間の理解、信頼関係を築くことが成功である」という言葉に、参加者は、情報を単に押し付ける説明会にならぬよう、対話の相手を意識して地域対話を継続していくことの大切さを実感していました。

リスクコミュニケーション研修のスケジュール（概要）

◆ 1日目（13時開始）

- ・ 講義 リスクコミュニケーション概論
～ステイクホルダーの関心～
- ・ 演習 ステイクホルダーの関心に応える
（グループワーク）
- ・ 発表、講評

◆ 2日目（朝から夕方まで）

- ・ 演習 メッセージの作成（グループワーク）
- ・ 演習 対話スキルトレーニング（グループごとに発表）
講評

※演習「ステイクホルダーの関心に応える」
「メッセージの作成」
臭気、保安防災などテーマ毎のグループで、地域住民の立場になってテーマに対する質問・意見を探り、それを参考に発表資料を作成します。

※演習「対話スキルトレーニング」
グループごとに発表者役、ファシリテーター役、その他工場長や大学教授役になり模擬対話を行います。

研修に参加された方からは毎年好評をいただいております。右図の研修後のアンケート結果をご覧ください。

いただいた感想から一部を紹介します。

【講義：リスクコミュニケーション概論】

- ・ リスクとはコミュニケーションとは、といった基本の考え方から丁寧に教えていただき大変参考になった。
- ・ リスクコミュニケーションの必要性、難しさがよく分かった。
- ・ プレゼンテーションをする側と受ける側のギャップについて、思った以上に存在することを改めて考えさせられた。

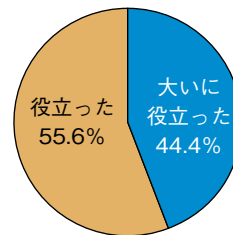
【グループワーク】

- ・ メッセージの具体的な作成方法を学んだ。皆様にわかりやすく説明する技法を学べたことはよかった。
- ・ 実践的なトレーニングは話を聞くだけよりも何倍も力になる。
- ・ 作成した資料を基に発表と質疑応答の中で実際の地域対話の雰囲気が味わえて、本当に地域対話に対応した有効な対話スキルトレーニングであったと感じた。

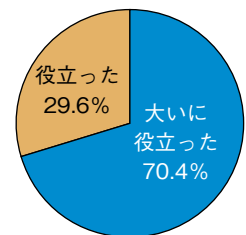
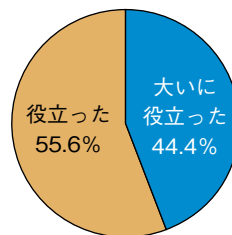
【全体を通して】

- ・ このような研修がもっと多くの人に広がればと思う。全国から多くの人が集まるだけでなく、多様な話が聞ける。またこのような内容での研修は、普段なかなかないし、地方の会社、工場にいると気づかず、つい単純な自己満足に終わることが多い。今後の地域対話に生かしていきたい。

講義：リスクコミュニケーション概論



グループワーク：
ステイクホルダーの関心を知る 対話スキルトレーニング



主婦や町内会長などの立場になって関心事を探ります



模擬地域対話

発表者、ファシリテーター、有識者等になりきって行います

ドバイ RCLG会議



GPCA会長の挨拶



GPCA会長とRCLG議長・事務局

ドバイRCLG会議

2010年度のRCLG秋季定例会議が、9月21～23日ドバイにて開催されました。秋季会議は活動方針を討議決定するという本来の目的に加えて、途上国のRC活動を支援するという狙いも持っており、毎年開催国を変えて開催されています。本年度は、湾岸諸国石油化学工業協会（GPCA）のRCLG加盟の可否を討議することから、同地域のドバイにおいてGPCAの主催で開催されました。

ドバイは、アラビア半島の南東部にあってペルシャ湾に面しており、アラブ首長国連邦（UAE）を形成する7つの首長国の1つです。原油に依存する経済からの脱却を目指して、金融センターや観光等の分野の発展に力を入れ、主に海外からの投資を主体に開発を進めてきました。リーマンショック時には、海外からの投資が手控えられたことから開発が一時停滞したものの、椰子の木の形をした人工島（高級別荘地）、世界一高い超高層ビル（828m）や高級ショッピングモールも完成し、最近では中断していた開発も再開されてきており、再び経済に活気もどってきています。

このような環境の中で開催されたRCLG会議には、米国、ベルギー、フランス、ドイツ、南アフリカ、湾岸諸国、中国（AICM）、シンガポール、タイ、インドネシア、インド、ニュージーランドに日本を加えた13の国と地域の化学工業協会と企業から40名以上が参加しました。会場は、空港近くのホテルに併設されたコンベンションセンターです。日本からは、RC委員会運営幹事会の諫山主査（三井化学）、RCLG塩崎副議長（住友化学）と日化協の吉原RC推進部長の3名が参加しました。

会議は、GPCAボードメンバー、RC委員会議長であるAbdulrahman Jawahery氏の挨拶で始まりました。以下主要な討議内容について紹介します。

GPCAのRCLG新規加盟承認

GPCAより、最初にGPCA組織全体の説明、次いでその中のRC委員会の活動状況の説明、引き続いて会員4社による活動事例報告があり、最後にその内容を会議参加者が評価して加盟承認の可否を決めるという手順で進められました。

- 1) GPCA概要：GPCAは、22か国の139社が会員であり（34社が正会員、105社が準会員）、34社の正会員で湾岸諸国化学工業生産高の90%以上を占めています。RC委員会は、6つの委員会の中の1つです。
- 2) RC委員会活動：2005年に設立され、正会員は13社、準会員が2社です。2010年度までは、ロゴ登録やRCプログラム開発などの基本的な要求事項を満たすPhase1であり、2011年度からは策定したRCプログラムを実践するPhase2をスタートする予定です。
- 3) RC会員の活動事例報告：Gulf Chemical Industries Company (GCIC)、SABIC、Al Biggs、Borougeの4社より、これまでのRC活動事例の報告が行われました。RC委員会の設立は2005年と新しいものの、これらの企業はそれよりも前からRC活動を実践しており、かなり充実した活動を行っていました。
- 4) RCLGのCartwright議長より、「上記GPCAのRC活動報告を聞いて十分に加盟の資格があると判断できる。従って、投票によることなく加盟を承認したい。」という提案があり、全員一致でGPCAのRCLG加盟が承認されました。GPCA（湾岸諸国）は、54番目の加盟国と地域となります。

多国籍企業の各国協会への加盟問題

多国籍企業が事業活動を行っている各国の化学工業協会へ加盟して、その国の協会活動を支援すべきであ



会議の全体風景



(会議終了時) GPCAの主催に対する感謝の盾贈呈

るという1月のICCA理事会での提案を受けて、RCLGが世界憲章に署名した155社の各国協会への加盟状況を調査し、結果の一覧をまとめました。これに対し、活動実績やセールスのみの場合の基準が不明確という指摘や、輸入セールスのみでも加盟すべき、まず企業と協会がコミュニケーションを図るべき等多くの意見が出され、これら意見をまとめて事務局が理事会への報告をまとめることとなりました。

化学品政策と健康グループ (CP&H) の活動状況報告

- ・ PS/GPS実践に向けて、同グループで進めているリスクアセスメントガイダンスの内容と、パイロット実施結果の説明がありました。
- ・ また、ステークホルダーが参加する今後の重要な国際会議への対応、関連して国連環境会議 (UNEP) とICCAの覚書締結、進行中のペンキ中の鉛やナノテク等SAICM実践プログラムの説明がありました。

KPI (パフォーマンス指標) データの報告数と質の改善

KPI未提出国へ報告提出を促す手法として、RCLGの検討チームから下記のように厳しい提案がありました。

- ・ KPI報告のBase Setを定め、報告を義務づける。
- ・ 報告がない国に対し、報告締切り90日経過時/180日経過時に、RCLG議長から督促のレターを出し、それでも報告がない国に対しては、RCLGからの退会を促す。

これに対し、「Base Setの内容も検討を要する」、「退会勧告は厳しすぎる」、「統計が不十分な途上国を考慮すべき」等々の意見が出され、事務/ワーキンググループで継続して検討することになりました。

その他のテーマについては、項目のみ記述します。

- ・ 英国によるピアレビュー (RC活動のこれまでの状況説明)
 - ・ 地域ごとに分かれた分科会討議: RCLGに求める支援
 - ・ 中国 (AICM) のRC活動状況報告
- 次回のRCLG秋季定例会議は、2011年10月24、25日インドネシアにて開催され、同会議に引き続いて26、27日にはアジア太平洋RC会議 (APRCC) を開催するという計画が、インドネシア協会より説明されました。

最後に、本RCLG会議のホスト協会であるGPCAに対して感謝の盾が贈られ、3日間の会議は無事終了しました。



会議参加者の皆さん

レスポンシブル・ケア報告書 報告会のお知らせ

レスポンシブル・ケア（RC）の重要な活動として、活動の成果を社会に公表して評価をいただくことや、社会とのコミュニケーションを行うことがあります。レスポンシブル・ケア委員会（RC委員会）では発足以来（1995年）、会員の活動を集約して、RC委員会としての活動も含めた年次報告書である「レスポンシブル・ケア報告書」を発行しています。報告書は会員各社へ配布するだけでなく、関係官庁、全国図書館、大学、新聞社、NGO等にも配布しています。また英語版も作成し世界の化学団体や企業にも送っています。

報告書の内容を説明する報告会も毎年東京、大阪にて開催し、会員企業の方々のみならず、行政、NGOの方々にもご参加いただいています。

また報告会では、会員の具体的な取り組み状況を報告していただくと同時に、テーマの関係分野に造詣の深い方の特別講演をお願いしています。

本年度の報告書報告会は下記内容にて実施いたしますので、皆様のご参加をお待ちしております。

● 「レスポンシブル・ケア報告書2010」報告会（東京）

2010年12月7日（火） 13：30～17：00

場所：発明会館（虎ノ門）

<http://hatsumeikaikan.com/page005.html>

● 「レスポンシブル・ケア報告書2010」報告会（大阪）

2010年12月14日（火） 13：30～17：00

場所：ホテルモンテレ大阪（大阪駅近く）

<http://www.hotelmonterey.co.jp>

特別講演

「日化協の新たなPS活動であるJIPSについて（仮題）」
 日化協 JIPS推進WG 永守主査

会員各社の取り組み

省エネルギー、保安防災、地域とのコミュニケーションについて3社から発表予定

※会員以外の方で報告会に参加ご希望の方は、下記まで連絡をお願いします。

日化協 RC推進部 電話：03 - 3297 - 2578

昨年の報告会の様子（上：東京、下：大阪）



今年度の地域対話

全国15地区において隔年で開催している地域対話は、今年度は7地区で開催予定です。既に岡山地区は11月11日に、山口東地区は11月16日に、大阪地区は11月25日に開催しました。各地区の対話の様子は順次、本誌で紹介する予定です。

地域対話開催15地区



今後開催される地域対話（右図赤字）

地区名	開催予定日
愛知地区	2011年2月7日（月）
千葉地区	2011年2月8日（火）
鹿島地区	2011年2月18日（金）
兵庫地区	2011年3月12日（土）

JRCC NEWS

RESPONSIBLE CARE 2010

No.59
AUTUMN

Index

VOICE	中央労働災害防止協会 理事長 澤田 陽太郎	2
	「第42回国際化学オリンピック日本大会」を終えて	3
	「日化協LR」10周年記念事業	4
from Members【第55回】	第一工業製薬（株） 執行役員 生産管理本部長 関口 恒さん	6
RCの現場を訪ねて	東燃化学（株） 川崎工場 UMG ABS（株） 宇部工場	8
	平成22年度 会員交流会（福岡）を開催しました	10
	リスクコミュニケーション研修	11
	ドバイRCLG会議	12
	レスポンシブル・ケア報告書 報告会のお知らせ／今年度の地域対話	14
	JRCCだより	16

表紙写真の説明

JSR株式会社四日市工場「朝ぼらけのブタジエンタワー」

夜明け前の四日市の空を背にして立つ、ブタジエンの抽出塔と貯蔵タンク群です。
やがて伊勢湾から昇る朝日を浴びて白く輝いてきます。新しい1日が始まります。

編集後記

- この時期は JRCC NEWS 秋季号と RC 報告書の発行が重なり、毎日バタバタとしています。
- さて会員交流会を九州で久しぶりに開催しましたので、その様子を掲載しました。会員交流会に初参加の方が殆どでしたが、活発な議論があり大変楽しく有意義な交流会となりました。また夜は博多の旨い肴と酒を満喫しました。



光悦寺

京都市北区にあり、本阿弥光悦が徳川家康からこの地を与えられ、職人を集め集落を形成したとのこと。その後光悦寺となった。市内で最も早く紅葉するお寺としても有名です。



☆会員動向 (会員数：94社 2010年10月末現在)

退会

フレキシス株式会社 (2010年9月30日付)

☆行事予定

2010年11月30日 (火)	会員交流勉強会
12月7日 (火)	RC報告書報告会 (東京)
12月8日 (水)	消費者対話 (東京)
12月14日 (火)	RC報告書報告会 (大阪)
2011年2月2日 (水)	顧問会議
2月7日 (月)	地域対話 (愛知地区)
2月8日 (火)	地域対話 (千葉地区)
2月18日 (金)	地域対話 (鹿島地区)

